

## 【地域再生まちづくり事業（初黄・日ノ出町地区）】

Yopp 令和6年12月PPP勉強会 公民グループ対話メモ

開催日：令和6年12月25日

対話者：京浜急行電鉄株式会社、都市整備局都心再生課、にぎわいスポーツ文化局創造都市推進課

参加者数：11人【業種別】建設2人、不動産2人、サービス3人、製造1人、その他3人

※ 設問は当日いただいた御意見に応じて区分しています。

### 設問1：活用のアイデア、アート以外のにぎわい創出のアイデア

#### 【主な意見】

- 市が掲げている構想、又は逆にこの地域にない発想でまちづくりを行う。
- 「アートのまち」の取組が表に出ていない印象がある。PR戦略を立てて、外から人を呼び込む仕組みが必要。
- 外部の人から見ると、エリア内の場所によっては暗くて重い印象。
- 初黄・日ノ出地区にわざわざ来る人は少ない。広くエリア内に誘因する施策が必要。
- 野毛から日ノ出町は歩ける距離のため、ウォークブルで繋がるような施策があるといい。
- 平常時に立ち寄ってみたが、まち全体をアートで盛り上げているようには感じられないため、もっと街中でアート展示できる仕組みがあるといい。
- にぎわい創出は飲食機能がキーになるため、これから飲食店経営をしたいと思っている人を育てる場としても面白い。
- 次世代でまちづくりを行う子ども達向けの人材育成の拠点
- アートと親和性の高い伝統工芸品の職人などを呼び込んで、昔ながらの職人長屋の様な形になれば面白いと思う。
- アートを取り入れたコワーキングスペース
- 単身の方に目をつけ、住民ベースでやりたい事業を行える新しい波をつくる。
- 時間軸と属性を掛け合わせた切り口でにぎわいづくりを考える。日常×ファミリー層であれば、子ども達が遊べる場所に変え、さらに地域の特性であるアートを取り入れる。非日常×シニア層であれば川を使った健康促進のイベントなどが考えられる。
- 自立・自走した組織づくりには財源確保が必要。遊び場を設ける場合、月額費用や入場料、広告料などの財源確保が考えられる。
- 歴史的な背景の情報発信拠点や美術鑑賞のワークショップ、アートを活用した高齢者の認知療法に繋がる取組、障害者アートPJを実施し自立支援
- 単身者向けのレジデンス事業。アーティスト以外の属性にも来てもらい地域と交流をもたせる。
- 短期でお店を出せる、地域のチャレンジショップの場
- イメージカラーやサインをつくるなどして、このまちのイメージづくりを行う。例えば、来街者向けに駅にサインを設置するなど。
- 横の連携を取り、赤レンガ倉庫などの集客力のある施設に来た人が、どうすれば初黄・日ノ出町の集客に繋がるのか検討する。
- アートを生かしながらデザインの商品を売る。
- 今後の事業形態を考えるうえで、Z世代と呼ばれる世代、学生、幅広い人から意見をもらう。

## 設問2：小規模店舗の使い方のアイデアについて

### 【主な意見】

- 商業的な利用が得意な企業に無料で貸出し、市が初期投資を負担する。長期的視点にたてば、最終的に色んな方が入ってくれば投資回収は容易
- 単身者向けのコワーキングスペースや、1対1のパーソナルトレーニングなどは定期的に来てもらえる。多目的で使える場所
- 占いやカラー診断、カウンセリングができる場所

## 設問3：組織体制について

### 【主な意見】

- 各事業者、各プレイヤーのやりたいことをまとめられる人がいるといい。他の地域の顔つなぎがしっかりできるように、フットワークが軽い方が個人的にはいいと思う。